

所有された「楽園」

— 『パラダイス』における「八岩層」の肌と純血（潔）の女性 —

銅 堂 恵 美 子*

序

Rubyの町はアメリカの縮図である。Peter Widdowsonは、“The American Dream Refashioned: History, Politics and Gender in Toni Morrison’s *Paradise*” (2001)において、Rubyの町の年代記が、アメリカの重要な歴史的事象を反映する形で描かれている事を詳細に分析し、Rubyの歴史に関する語り が1755年から始まり、それが“just before [America’s] founding moment” (316)である事、すなわち、1776年の独立宣言の直前である事を明らかにしている。さらにアメリカ南北戦争や奴隷解放宣言、第1次・第2次世界大戦、市民権運動やヴェトナム戦争、Kennedy大統領やMalcolm X、Martin Luther Kingの暗殺といったアメリカの歴史が、*Paradise*の複雑化された時系列の中に組み込まれている。注目すべき点は、Widdowsonが指摘するように、作品冒頭で描かれるRubyの町の男たちによる修道院襲撃事件が、アメリカ独立宣言200年記念の年である1976年に起こる事である。

Morrisonは、本作品において、襲撃事件を建国200年記念の年に設定する事で、先住民の土地を収奪し、所有する事によって建国されたアメリカのあり方に疑問を呈している。¹Susan Strehleは、Morrisonが排他的所有権の独占を

* 福岡大学人文学部講師

¹ 藤平は、アメリカ建国における先住民の犠牲という問題が*Paradise*で重要なテーマ

批判し、土地所有や奴隷制などの帝国支配の概念が存在しない場所として楽園（小文字の *paradise*）を描いていることを見抜いている（52）。しかしながら、Strehle の議論は、所有概念が内包する排他性や暴力性の指摘に留まっており、*Paradise* が提示する人種概念との繋がりから所有概念を再考察する必要性については論じていない。本論文では、アメリカにおける所有権の起源が人種的支配に根付いたものであることに着目し、人種概念の構築と所有概念の結びつきを問い直すことを目的として、*Paradise* を考察する。

Cheryl Harris は、ホワイトネス研究に多大な影響を与えた論文、“Whiteness as Property”（1993）において、アメリカにおける人種概念の構築は所有の問題と共に精察されなければならないとして、所有の権利が白人の権利として規定される事で、「白人」という特権的カテゴリーが構築されてきた歴史を明らかにしたが、Haven 及び Ruby の町においても、土地やその所有権は、政治家を祖先に持ち、アメリカ建国以前の 1770 年代からアメリカに居住する「八岩層」の肌の色を受け継ぐ Morgan 一族によって限定的に継承されている。*Paradise* は、白人社会に反抗して作られた黒人の共同体社会が、財産所有を特定の人種の特権とする仕組みを生み出した事で、アメリカの白人社会が行なった排除と暴力を繰り返してしまう姿を描いている。Morrison は先住民の土地の犠牲の上に建国されたアメリカ及び Haven や Ruby の町が「楽園」となる事は可能なのかという問いを模索しながら、土地や財産の所有という問題の暴力性を露呈しているのである。

本論では、Morrison が特権的に所有される「楽園」という概念を否定し、

となっている事を論じている。修道院がかつてカトリック系の先住民・スクールであった事に注目し、先住民の文化と言語の喪失のモチーフが描かれている事を指摘している（49）。尚、Haven の町が築かれたオクラホマは、先住民の特別保護区と制定された強制移住地が設置された州であり、1870 年代には、肥沃なこの土地の解放を求める法案が繰り返し提案され、1889 年には「オクラホマの土地解放」が宣言され、多くの黒人が新天地を求めて移住した。Ruby の町のような黒人の町が歴史上実際に多く存在したのである。（森 63）。

排他的に所有されたり、継承されたりする場所ではないものとして「樂園」を再定義している事を論じる。その際、所有という特権がいかに関人種概念と結びつき機能したのかを明らかにすると同時に、所有によって特定の人種カテゴリーが特権化されるためには、女性のセクシュアリティの抑圧が不可欠となる仕組みを精査したい。

I. 土地所有

Haven の歴史は、アメリカの建国の歴史と同様に、先住民の土地を奪う事で始動する。祖父である Zechariah Morgan は、州の役人として政界に進出するほどの人物であったが、南部再建時代における黒人の社会的進出に対する反対から政界を追われ、その後極貧の暮らしを強いられたため、新天地を探すべく西部へと旅に出る。雑誌 *Herald* に書かれた “Come Prepared or Not at All” (13)² という宣伝文句は、Zechariah 一行に期待を抱かせたが、彼らの漆黒の肌の色と貧しさを受け入れてくれる場所はなく、裕福なチョクトーインディアンや貧乏白人、娼婦にも拒絶され、Fairy という町では肌の色の薄い黒人から「拒絶 (“Disallowing”）」(189) される。頑固さと誇りを一層強固にしなが、 “the signs God gave them to guide them” (14) に従い西へと移動し、 “the walking man” に導かれた Zechariah 一行は、ステイト・インディアンの土地に辿り着き、その土地の一部の所有権を主張するのである— “This is our place.” (98)。

It belonged to a family of State Indians, and it took a year and four months of negotiation, of labor for land, to finally have it free and clear.

Coming from lush vegetation to extravagant space could have made

² *Paradise* からの引用は全て *Paradise* (Knopt, 1998) により、これ以降この作品からの引用は本章において頁数のみを記す。尚訳語は、大社淑子訳『パラダイス』(早川書房)を参考にさせて頂いた。

them feel small when they saw more sky than earth, grass to their hips. To the Old Fathers it signaled luxury—an amplitude of soul and stature that was freedom without borders and without deep menacing woods where enemies could hide. . . . Here freedom was a test administered by the natural world that a man had to take for himself every day. And if he passed enough tests long enough, he was king. (98-99)

ここで注目すべきは、Zechariah 一行が土地の所有権を獲得した方法が、「労働」によって土地を獲得したアメリカの所有の歴史と重なる点である。Haven の創始者たちは、アメリカの創始者たちのように暴力的に先住民から土地を収奪する事はなかったが、彼らが土地を獲得するためには、1年4ヶ月の交渉に加え、「土地のための労働」が必要であった。「腰の高さまで生えている草」が生い茂る自然の状態の大地を切り開き、「労働」を加える事によって整地された土地は、労働を加えた者に「王者」の称号を与え、「自由」をもたらすのである。改良や改善を加えられていない土地が無価値であり、それに労働が加えられる事によって価値あるものへと転換され、さらに、価値を生み出した者、つまり労働を加えた本人にその土地が所属すると唱えた John Locke の所有論を利用して先住民から土地を奪ったアメリカの創始者たちと同様に、それが暴力的収奪ではなかったとは言うものの、Zechariah 一行は自然の状態の土地に「労働」を加える事によってネイティブ・アメリカンの土地の所有権を獲得したのである。

土地の所有は、白人社会で差別を受けた黒人たちにとって、安全と安心、そして自立と自由を確実にした。Zechariah の継承者であり、Ruby の町の支配者である Steward は、所有する牧場地を自由に馬で駆けながら、「自分の土地 (“own land”）」と呼べるものを所有する重要性を語っている。

He loved to roam the pastures, where everything was in the open. Saddled on Night, he rediscovered every time the fresh wonder of knowing that on one's own land you could never be lost the way Big Papa and Big Daddy and all seventy-nine were after leaving Fairly, Oklahoma. (96)

ここで Steward は、祖父たちの屈辱的な経験を繰り返さないためには、「自分の土地」と呼べる場所を確保し維持する必要があると感じている。“Out There” (16) と呼ばれる Ruby の町の外の世界では、黒人は「衝動的な鞭打ち、殺人、放火による追放の犠牲者」(112) にされ、そこに黒人が「一人でいる事は死を意味した」(16)。そのような場所から隔離された安全な「楽園」を築くためには、自分のものと呼べる土地を所有し、それを維持していく必要があるというのである。

しかし、Ruby の町の男たちが抱く土地所有への欲望は、もはや「理想の町」の建設という高尚な理念に基づくものではなく、その一部は拝金主義的なものへと転化してしまっている。若者との確執、虐待や暴力など Ruby の町が内部から崩壊する理由を修道院の女たちのせいにする男たちの言い訳の中には、経済的な理由が介在している。

[Sargeant] would be thinking how much less his outlay would be if he owned the Convent land, and how, if the women are gone from there, he would be in a better position to own it. Everyone knew he had already visited the Convent—to “warn” them, which is to say he offered to buy the place, and when the response was an incomprehensible stare, he told the old woman to “think carefully” and that “other things could happen to lower the price.” (277)

修道院の女たちに「警告した」と言い訳する Sargeant であるが、実際は脅しに近い警告である。警告を受けた女たちは “an incomprehensible stare” を与えるが、それは彼女たちが修道院の土地の所有権を保持していないからである—“The title was in the hands of the benefactress’ foundation . . . so the house and land were not exactly church owned.” (232)。修道院の所有権もその土地の所有権も保持していないにも関わらず、彼女たちは交渉を迫られ、最終的には襲撃されてしまう。

そもそも Ruby の町では、土地や財産の所有は双子の Morgan によって特権的に独占されている。Patricia が “ [The Morgans] ran everything, controlled everything.” (217) と述べるように、双子の Morgan は、土地や財産を所有し、独占する事で町を支配している。Morgan 家は、“the richest ones” (193) と呼ばれ、1000 エーカーほどの土地を所有し (10)、Deacon と妻 Soane は町で一番大きな家に住んでいる (100)。さらに、記憶力や知恵よりも畏れられていた「魔術的な (“magical”)(107) 貯蓄法を知る双子の Morgan が所有する銀行は、Ruby の町では教会よりも存在感を放ちながら、通りを「独り占めしている (“hog”)(88)。Ruby の町は、土地や財産を独占する Morgan 兄弟によって牛耳られている。Morgan 家の「正当な」最後の末裔である K.D. が、Arnette Fleetwood を孕ませ、暴力を振るうという問題を起こした際には、負債を抱えている Fleetwood 家に対し、Arnette の大学資金を申し出る事で問題を解決しようとする (60)。Deacon がセダンでオーヴンを毎日ゆっくり周回する姿を疎ましく思う Anna に対し、“He’s just checking on things. . . . Got a right, doesn’t he? It’s sort of his town, wouldn’t you say His and Steward’s?” (115) と Misner 牧師が述べるように、Zechariah の財産を相続した Steward と Deacon は、町で一番の財力を保持し、住民の生活を支配しているのである。

一方 *Paradise* には、所有や独占ではなく、共有や交換という概念が様々な

形で描きこまれている。³ Havenの町を築き上げた Zechariahは、先住民から土地を譲り受けると同時に、まだ貧しかった住人たちが共有し、食べ物を分け合う場となるオーヴンを建設する(6, 15)。また、Ruby建設当初においても同様に、住民が株を買う事で町を支えようとする連帯の精神が存在した—“Everybody pitched in. . . Families bought shares in it, you know, instead of just making deposits they could run through any old time.” (115)。Misner牧師は、利益を考えない団体である消費者信用組合を作り、教会員たちへのローンや罰則なしの返済計画を提供している(56)。しかしMorgan家の男たち—K. D.やDeacon、Steward—は、Misner牧師の作った制度を“piggy bank”(56)だとして罵るように、彼らにとって重要な事は、経済的利益を生み、資産を増やす事なのである。救急車・霊柩車としてヴァンを運転し、双子のMorganに負債を負って生活しているRoger Bestや、通信販売の影響で経営危機に陥っているFleetwood家の家具・電気器具店を助けるどころか、心配する様子もないDeaconを見て、妻のSoaneはなぜ彼が、住民を助けようとしなにか理解できない—“she didn’t understand why he wasn’t worried enough by their friend’s money problems to help them out.” (107)。Soaneは、修道院で作られる強壯剤とサングラスを交換したりしながら、Consolataと長年にわたる物々交換⁴を行なっている(44)。この強壯剤の中身は“rosemary, a

³ 多くの批評家が、修道院とRubyの町を二項対立的存在として解釈しているが、両者には、共通点や共存関係が存在する事を無視してはならない。修道院の女たちを結婚式に招待したSoaneは、Consolataと長年の交友関係を持ち、LoneとConsolataは二人とも幼い頃誘拐され、特殊な力を持つという共通点を持っている。K.D.はGigiの元へ通い、DeaconはConsolataと逢引しているように、修道院とRubyの町には往来が存在する。また、Rubyの町の家料理が、修道院で取れる唐辛子の存在に依存しているように、修道院とRubyの町の住民は、共存している。さらに、Rubyの町の住民も修道院の女たちも共通して「家」を求めている。両者を二項対立的に論じる批評は次を参照(Rubenstein 146-47; Krumholz 25; Bouson 213)。

⁴ 物々交換だけでなく、Rubyの町の人々は、修道院へ唐辛子やバーベキューソースなどの品を購入に出向いている。味覚が鋭くないStewardのために料理するDoveyは、修道院で栽培される唐辛子さえあれば料理はどうにかなると述べ、彼女の家庭料理には、修道院の唐辛子が欠かせない—“Convent peppers, hot as hellfire, did all the cooking for

little bran mixed with aspirin” (167) であるが、Deacon は信用できないと述べ (112)、妻の行動を批判する。息子を失った悲しみに暮れながら日々の労働をこなす Soane には、強壮剤や Connie との交流が必要であるが、Deacon には、理解できない。このように、Morrison は、排他的所有という価値観が共有という価値観を蝕む様を描いている。

Ⅱ. 所有と人種—純血（潔）の女性—

アメリカにおいて、「純血の白人の血」を持つ者だけが正当な「子」として家や土地といった財産を継承したように、Ruby の町においても、土地や財産の所有は、特定の肌の色を持つ者に限定されている。Ruby の町において「正当」とされる血筋は、薄い肌の色の黒人に「拒絶」された「八岩層」と呼ばれる漆黒の肌の色である。

8-R. An abbreviation for eight-rock, a deep deep level in the coal mines. Blue-black people, tall and graceful, whose clear, wide eyes gave not sign of what they really felt about those who weren't 8-rock like them. Descendants of those who had been in Louisiana Territory when it was French, when it was Spanish, when it was French again, when it was sold to Jefferson and when it became a state in 1812. (193)

土地や財産の所有と白人である事が結びつけられ、「白人」という特権的カテゴリーが構築されたのと同様に、Ruby の町でも、土地や財産の所有とその継承は、漆黒の黒い肌の色と結びついている。「八岩層」の肌の色を持ち町一番の権力者である Steward と Dovey の間には子どもがおらず、Deacon と

her.” (82)。

Soane の息子 Scout と Easter はヴェトナム戦争で戦死し、3 番目の子は流産してしまうが、そんな彼らに残されたのは、Morgan 家の最後の「正当な」男系子孫である K.D. である—“their hope and their despair, was the last male in a line that included a lieutenant governor, a state auditor and two mayors.” (55)。彼が「絶望的」な存在であるにも関わらず、Steward は K.D. と彼の子どもが Morgan 家の財産を継承できるように手配する—“Steward, insolent and unapologetic, took K.D. under his wing, concentrating on making the nephew and the sixteen-month-old grandnephew rich (thus the new house), easing K.D. into the bank . . .” (299-300)。K.D. と Arnette の新しい家は、Steward の所有する土地に建てられ (299)、K.D. は双子が所有する銀行に職を得るように、土地や財産は漆黒の黒い肌を保つ Morgan 家の子孫に限定的に継承される。

「八岩層」の肌の色の特権的カテゴリーとして維持するための排除や暴力は正当化されている。Ruby の町で毎年行われる生誕劇では、町の成立が神話化された形で語り継がれるが、役柄など、人が選ばれたり、順位をつけられる基準は、肌の色である (216)。肌の色の薄い Delia と結婚した Roger Best は、“He’s bringing along the dung we leaving behind.” (201) と Steward に罵られた上に、霊柩車の仕事を与えられ、経済的成功の機会を奪われる。Menus Jury は、ヴァージニアから連れてきた肌の色の薄い女性と結婚するため家を購入するが、町の権力者によって拒絶され、家と恋人を失い、アルコール依存症となる (195) —“That pretty redbone girl they told him was not good enough for him; said she was more like a fast woman than a bride.” (278)。こうした排除と暴力は、Haven から伝わる「父の法 (“the father’s law”)」、すなわち「連続と繁殖の法 (“the father’s law, the law of continuance and multiplication”）」により正当化されている (279)。

Ruby の町の男たちを悩ますものはみな、「女からくる (“everything that

worries them must come from women”）」(217)と考えられたように、「八岩層」の肌の色を永續化させ続けるためには、「八岩層」の女性が「八岩層」の男性の子供を産み続ける必要がある。Rubyの町では、正当な血筋を断絶させない方法として「引継ぎ(“takeovers”）」(196)と呼ばれる再婚制度が設けられ、女たちは子孫繁栄のため、老人や近親との生殖を強いられている。しかし、町の系図を作成する過程で血の掟の存在に気づいたPatriciaが述べるように、純度を落とす事なく子孫を繁栄させ続ける事、そして人々のセクシュアリティを抑圧し、管理する事など不可能である—“Did they really think they could keep this up? The numbers, the bloodlines, the who fucks who?”(217)。すでにRubyの町では、「血の掟」は破綻し始めている。歴史的な近親交配の影響でFleetwood家の子ども4人は障害児であり、母親のSweetie Fleetwoodは精神的に追い詰められて修道院へ逃げ出している。また、町の支配者である双子のMorganには子どもがいないように、「八岩層」の肌の色は存続の危機に瀕している。加えて、K.D.とGigi、DeaconとConnieの逢引に見られるように、欲望の対象を「八岩層」だけに限定する事も不可能である。

「正当」な血筋の子どもを産むという作業は、女性にしかできない事から、「連続と繁殖の法」の鍵は女であると認識されているが—“Women always the key, God bless ‘em.”(61)—、それは“a good woman”(112)に限定されている。Stewardが「家」と呼ぶ牧場で飼う雌犬の名がGoodであり、生誕祭のステージに登っている少女たちの名前が“Hope, Chaste, Lovely and Pure”(208)であるように、彼らが必要とする女は、従順で家庭的な女だけである。ArnetteがK.D.に暴力を振るわれた時、“She ain’t been hit since she was two years old.”とJeff Fleetwoodが述べると、“That maybe the problem.”(59)とStewardがすかさず返答するように、Rubyの町では、暴力を振るってでも女を“a good woman”として躰ける必要があるのだ。そして、子を産み・育てる「善良な女」以外の女は排除の対象となる。3歳の時に通りの真ん中で馬に乗

るために下着を下ろし、驚異的なセクシュアリティを見せた Billie Delia は Ruby の町から排除されるが、彼女の母である Patricia が娘の性的奔放さに恐怖と怒りを感じ暴力を振るってしまうのは、色の薄い娘に「淑女 (“lady”）」として育ち生きる事を期待していたからである—“Pat realized that ever since Billie Delia was an infant, she thought of her as a liability somehow. Vulnerable to the possibility of not being quite as much of a lady as Patricia Cato would like.” (203)。「淑女」としての振る舞いを躰けるため Patricia が Billie Delia に暴力を振るうように (151)、Ruby の町では、女は暴力的に「淑女」として躰けられ、「淑女」でないものは「娼婦」と呼ばれ排除されるのである。

Ariela J. Gross は法と歴史の観点から人種アイデンティティについて論じた著書 *What Blood Won't Tell* (2010) において、南北戦争後から 20 世紀初頭にかけて Jim Crow 法が機能した時代に、法廷で個人の人種を特定するための判断基準となったのが、当事者の「評判と行動 (“reputation and performance”）」(101) に関する証言であったと論じている。その際、当事者が女性である場合、彼女が白人であると裁定されるためには「純潔」である必要があったと主張している。⁵

Like the claims of white manhood, women's claims of whiteness also rested on honor, but of a very different kind. Most obviously, a white woman's honor lay in the purity of her sexuality, in stark contrast to the degraded sexuality of a black “Jezebel.” Thus for a woman, performing whiteness meant acting out purity and moral virtue. (58)

⁵ 人種と所有の関係を論じた Harris も同様に、人種規定において「評判」が重要となった事を論じている—“The reputation of being white was treated as a species of property, or something in which a property interest could be asserted. In this context, whiteness was a form of status property.” (1734) ; “The idea of self-ownership, then, was particularly fertile ground for the idea that reputation, as an aspect of identity earned through effort, was similarly property.” (1735)。

Deacon が Ruby の町を誇らしく語る時、そこにいる女たちは“elegant black women” (111) と呼ばれ、“slack or sloven woman” (8) が存在しない事が強調されるように、正当な「黒さ」を保持する Ruby の女性もまた、「純潔」な「淑女」でなければならないのである。しかし Billie Delia は実際のところ「処女 (“untouched”）」 (151) であり、14 歳で性行為を行い、妊娠してしまうのは、正当な血筋を持つとされる Arnette の方である。

Elder Morgan の話を振り返る Steward Morgan の語りには、「娼婦」に対する暴力と排除の願望が描かれている。ニューヨーク周辺を散歩していた Elder は、二人の白人男性が一人の黒人女性と口論している場面に遭遇し、始めは女性が“streetwalking woman”であった事から男性たちに共感していたが、彼らが黒人女性を殴り倒した瞬間、それは直ちに白人と黒人の問題へと転換したと言う—“the scene slid from everyday color to black and white” (94)。白人たちに殴り掛かった後、警察から逃れるため倒れた黒人女性を置き去りにしてその場を去った Elder は死ぬまで彼女のために祈ったが、一方 Ruby の町の中心人物である Steward は、その黒人女性が“a whore” (95) であった事を考えると、彼女を殴り倒した白人の手が自分の拳だったらと考え、興奮する—“ [He] could see their point, could even feel the adrenaline, imagining the fist was his own.” (95)。ここで Steward が黒人娼婦を殴る白人男性の拳を自分の拳に置き換えて考える時、女性のセクシュアリティに対する抑圧と暴力は、人種の枠組みを超えて正当化されている。すなわち、“a whore” に対する暴力のためであれば、白人と黒人の男の拳が人種の枠組みを超えて一体化されるという事であり、彼の発想は、最終的にジェンダーの言説が人種の言説を超えて機能する事を顕示している。

Billie Delia の評判を決定的に転落させたのが彼女の薄い肌の色ではなく、通りで下着を下ろした行為である事からも明らかのように、これらのエピソードはジェンダーの言説が人種の言説に先行する様を描き出している。同様に、

修道院の女たちが Ruby の男たちを悩ませる理由が、人種の多様性ではなく、彼女たちの制御不可能なセクシュアリティである事には注意が必要である。修道院を襲撃した Ruby の男たちにとって、修道院の女たちは「父の法」に従属しない“outlaw women” (169) であり、“Bitches. More like witches”、“slack”、“sloven” (8) なのであって、Steward が殴る事を想像して興奮した黒人の娼婦と同じ“whores” (18) なのである。すなわち彼女たちは“whore”と定義される事により、抑圧や暴力の対象として認識される。しかし、Soane が “These are women, Dovey. Just women.” (288) と述べるように、彼女たちは「娼婦」ではなく「ただの女」である。だが、女たちの意見は Ruby の町では無視されてしまう—“But they were just women, and what they said was easily ignored by good brave men on their way to Paradise.” (202)。「女たちが鍵だ」という言葉の真意は、男たちの決定に意見する事なく、従うだけの従順な「淑女」は受け入れるが、それ以外は「娼婦」として排除するという抑圧的思考である。

Ⅲ. 「所有」されない場所

「楽園」として築き上げられたはずの Ruby の町が、「八岩層」の肌の色を持つ者によって支配される「監獄 (“prison”）」 (308) と化してしまった一方、Morrison は、「監獄」を抜け出し、新たな「家」や「楽園」を求める者たちを描いている。修道院に集まった女たちは、皆「ホームレス」の状態で、「家」を求めており、例えば9歳の時、白人の男にレイプされていた Consolata は、Mary Magda の誘拐の手を拒まず、母国であるブラジルを去り、修道院に連れて来られるが、彼女は常に「故郷」 (228) と呼べる家を求めている。また、双子の赤ん坊を車の中で窒息死させてしまった Mavis も、暴力亭主のいる家

を抜け出し、本当の家と呼べる場所を求めて修道院へと辿り着く。Pallas は、芸術家の母に恋人の Carlos を奪われ、その後、レイプされた後、Demby の病院で出会った Billie Delia によって修道院へ連れて行かれ、Seneca は、姉だと思っていた母 Jean に捨てられた後、養家の家⁶ を転々とし、時には性の遊び道具として利用されながら「ホームレス」の状態を続けている。そして Gigi は行方不明の母と死刑宣告を受けて刑務所に入っている父を持ち、祖父とトレイラー暮らしの生活をしてきたが、Mikey と出会い、公民権運動に関わるようになる一方、Mikey が逮捕された後は、孤独に陥り、行き場をなくしてしまう。さらに Haven の町の住民は、先住民から土地を譲り受けるまでの間、「ホームレス」であった。では、彼らが探す新たな「家」とはどのようなものか。

Paradise には、独占的に所有される土地ではなく、誰の所有権も及ばない家や場所が存在する。Deacon と Consolata の逢引の場所である「焼け落ちた家 (“a burnt-out house”）」(230) は、Consolata にとって「心の故郷 (“her mind’s home”）」(233) となるが、この家はかつてはある一家の所有物であったが、火事の後放置されてしまった家である。Mikey が Gigi に教えた岩、すなわち、二人の男女にも、二人の女性にも二人の男性にも見えるカップルが愛を交わしているように見える岩 (64) や、小人症の Dice が Gigi に話したお互いに抱擁し合っているように見える 2 本の木も (66)、「焼け落ちた家」と同様に、誰かによって独占的に所有される物ではない。Morrison は、こうした共有物を、簡単には手の届かない場所に配置している。「永遠に愛を交わす男女」に見える岩は、毒蜘蛛のいる砂漠を徒歩で 1 時間も進んでいかなければ辿り着けない場所に存在し (63)、Gigi が探す抱擁し合っているように見える木のイメージと重なる Consolata と Deacon の逢引の場所に生えるイチジクの木—

⁶ 養家の元では性的虐待に合うが、その度に養母は Seneca を追い出してしまふ。物静かで争いを好まない Seneca は、“it was something inside that was the matter.” (261) と考え、自分の体を傷つけ始める。彼女は体の傷を “The little streets” (260) と呼び、“the map” (260) を描いていた。

“two fig trees growing into each other”—に到達するには、藪や茨をかき分けながら歩いていかなければならない (230)。さらにこの木や「焼け落ちた家」が存在する Ruby の町は、“Way out in the middle of nowhere” (66) に位置している。

作品の最後に描かれる「楽園」も、これらの石や木、焼けた家と同様に、誰にも所有されていない場所である。Melanie Anderson が “The final image of the two women on the beach is not of a perfect place” (318) と述べる通り、この「楽園」は、欠点のない完璧な空間として提示されてはいない。最初に Consolata が修道院の女たちに語る Piedade⁷ は、エメラルド色の水やサファイヤ、ルビー、カーネーションに囲まれているが、最終的に Consolata を待ち受ける Piedade⁸ は、「捨てられた瓶の蓋 (“[d] iscarded bottle caps”）」が光り輝き、「破れたサンダル (“a broken sandal”）」や「壊れたラジオ (“[a] small dead radio”）」、「海の藻屑 (“sea trash”）」に囲まれている (318)。この最後の描写については多くの批評家が論じているが、中でも Channette Romero は “Creating Community: Religion, Race, and Nation in Toni Morrison’s *Paradise*” (2005) において、「再利用」や「再生」という重要な概念を指摘して以下のように論じている。

This paradise is recycled from the broken and the discarded, a place where the spiritual intermingles with the material. The text allows the

⁷ Piedade は、Linda Krumholz が “the lost mother” (31) と呼び、鶴殿えりかが「幼い時ブラジルから連れ去られたコンソラータの記憶の中の母」(『トニ・モリスン』254) と説明するように、Consolata によって理想化された母の姿であると考えられる。

⁸ 最後に登場する Piedade の姿は、Morrison が聖母マリアのイメージを描き直した姿でもある。Ron David は Piedade とは、イタリア語の Pieta から派生したものである事を指摘し (188)、森あおいは、「ピエタが西洋芸術の世界では、十字架から降ろされたキリストの遺骸を膝に抱く聖母マリアのモチーフ」であるが、Morrison は Piedade を「薪のように黒い」肌の色で表す事で、「西洋的価値基準のもと白人化されたマリアのイメージを修正」していると指摘する (203, 204)。

reader to see the “sparkle” of this discarded “trash” while acknowledging the “endless work” that will be require to make it anew. (423)

ここで Romeo は「壊れて捨てられた」「ごみ」の「輝き」に注目し、「楽園」が「リサイクル」されるものである事を指摘している。⁹しかし、ここで注目すべき最も重要な点は、この場所には誰の所有物も存在していないという事である。この「楽園」は、以前 Consolta が語っていたルビーやサファイヤという人間の所有欲を掻き立てるような富が存在する場所ではなく、破棄されてしまったサンダルやラジオのように、かつては誰かの所有物であったが、「ごみ」となった物だけが存在する場所である。この「楽園」は、所有者からの略奪や収奪の危険性がない場所¹⁰であると同時に、来訪を希望する者には「窓 (“window”）」(305, 307) が開かれている。そこでは、壊れた物や破棄された物が “endless work” (318) によって永遠に作り変えられる。¹¹

... can't you imagine what it must feel like to have a true home? I don't mean heaven. I mean a real earthy home. Not some fortress you bought and built up and have to keep everybody locked in or out. A real home. Not some place you went to and invaded and slaughtered people to get. Not some place you stole from the people living there, but your own home ... (213)

⁹ その他にも、Melanie Anderson は、ここで描かれる楽園が、生と死の間に存在する「精霊の空間」と述べる—“This space is a true cross roads of physical and temporal space: a space of spirits.” (319)。

¹⁰ Morrison はエッセイ “Home” において「家」という概念について次のように語っている—“On out, beyond, because nothing around or beyond considered her prey.” (10)。ここでは、女性が所有物である「獲物」として狙われる危険性がない事も指摘されている。

¹¹ Fraile-Marcos も同様の指摘をしている。Fraile-Marcos は、Morrison の描く「楽園」は、“neither closed nor fixed, but a condition that has to be continuously worked on” (30) であると主張する。

結

Morrison は、「樂園」を築くべく先住民の土地を犠牲にして建設された Ruby の町及びアメリカという国のあり方を問い直し、所有という行為が内包する排他性や暴力性を明らかにしながら、「樂園」が永久に固定され、独占的に所有される場所ではなく、常に作り変えられるものである事を示している。Morrison が提示する「樂園」は、特定の者にだけ「所有」され、「継承」される「永続的」な場所ではなく、誰にでも開かれた場所である。共有や交換による共存という概念を作中に散りばめながら、所有の危機性を問い、それに伴う権力によって抑圧される者たちに声を与えることで、「ごみ」として社会から排除・廃棄された物 / 者たちを再創造する可能性を提示している。

修道院襲撃事件の後、¹² Ruby の町は確かに変化を見せ始める。Deacon は、以前は車で移動していた道を自分の足で、しかも裸足で歩いて Misner 牧師のもとへ向かい、初めて自分の言葉で語り始める (301)。その言葉は、“hot misshapen” (301) であり、修道院の女たちが雨の中行った自己解放の儀式で実践した “loud dreaming” (264) と類似するもので、変化や変身を予期させる。また、Ruby の町に新たな道ができる可能性が語られる様子は (306)、Ruby の町の再出発を暗示している。しかし、Ruby の将来を任されているのは K.D. であり、K.D. と Arnette の息子である。K.D. は修道院襲撃事件の中心人物の一人である上に、Arnette を孕ませ、暴力を振るい、さらには修道院の女たちによって子どもを奪われたと虚言する人物である。Richard Misner や Anna Flood のように “Just yonder” (307) へと通じる「窓 (“window”）」 (305, 307) を見る事ができる人物が存在する事は確かであるが、それは少数である。

¹² 藤平は、遺体の消失は、作品において繰り返される「消失」「無」「不在」のモチーフの逆説性を収斂する役割を果たすと主張する (45)。Misner が Arnette と K.D. の結婚式で掲げた十字架が、見えないキリストの体、「不在の体」を象徴し、それにより人々の意識にリアルに存在し始めたように、消えた遺体は、Ruby の人々の意識にのしかかる「喪失感」と重なると説明する (46)。

Deacon が行う裸足の歩行についても、それが、曾祖父たちが行った歩行の繰り返しであるならば (301)、この作品の終わりを楽観的に考える事はできない。¹³ 壊れた Ruby の町を「心の故郷」と呼べる場所へと作り変えていくためには “endless work” (318) が必要なのだ。

参考文献

- Bouson, Brooks J. *Quiet as Its Kept: Shame, Trauma, and Race in the Novels of Toni Morrison*. State University of New York Press, 2000.
- Cronin, Mary M. “A Chance to Build for Our Selves.” *Journalism History*, vol. 26, no. 2, 2000, pp. 71-80.
- Dalsgard, Katrine. “The One All-Black Town Worth the Pain: (African) American Exceptionalism, Historical Narration, and the Critique of Nationhood in Toni Morrison’s *Paradise*.” *African American Review*, vol. 35, no. 2, 2001, pp. 233-47.
- Davies, Margaret. *Property: Meaning, Histories, Theories*. Routledge, 2007.
- Grewal, Gurleen. “The Working Through of the Disconsolate: Transformative Spirituality in *Paradise*.” *Toni Morrison*, edited by Lucille P. Fultz, Bloomsbury, 2013, 40-54.
- Gross, Ariela J. *What Blood Won’t Tell: A History of Race on Trial in America*. Harvard UP, 2008.
- Harris, Cheryl I. “Whiteness as Property.” *Harvard Law Review*, vol. 106, no. 8, 1993, pp. 1707-91.
- Krumholz, Linda J. “Reading and Insight in Toni Morrison’s *Paradise*.” *African American Review*, vol. 36, no. 1, 2002, pp. 21-33.
- Kubitschek, Missy Dehn. *Toni Morrison: A Critical Companion*. Greenwood Press, 1998.

¹³ 歴史は、変化のない繰り返しではなく、変化を取り入れて作りかえていかなければならない事は、Deacon と Steward が Haven の歴史を繰り返し (“repeated exactly”)(113)、「複製 (“duplicates”)(161)を生み出して失敗した経験に提示されている。詳しくは、Linda J. Krumholz の “Reading and Insight in Toni Morrison’s *Paradise*” (2002) を参照。

- Locke, John. *Two Treatises of Government*. Edited by Peter Laslett, Cambridge, Cambridge UP, 1970.
- Lubiano, Wahneema. *The House that Race Built*. Vintage Books, 1997.
- Mori, Aoi. "Reclaiming the Presence of the Marginalized: Silence, Violence, and Nature in *Paradise*." *Toni Morrison*, edited by Lucille P. Fultz, Bloomsbury, 2013, pp. 55-74.
- Morrison, Toni. *Paradise*. 1997. Plume, 1999.
- Romero, Channette. "Creating Community: Religion, Race, and Nation in Toni Morrison's *Paradise*." *African American Review*, vol. 39, no. 3, 2005, pp. 415-30.
- Rubenstein, Roberta. *Home Matters*. Palgrave, 2001.
- Saks, Eva. "Representing Miscegenation Law." *Interracialism*, edited by Werner Sollors, Oxford UP, 2000, pp. 61-81.
- Strehle, Susan. *Transnational Women's Fiction: Unsettling Home and Homeland*. Palgrave Macmillan UK, 2008.
- Tally, Justine. *Paradise Reconsidered: Toni Morrison's (Hi) stories and Truths*. Lit Verlag, 1999.
- Widdowson, Peter. "The American Dream Refashioned: History, Politics and Gender in Toni Morrison's *Paradise*." *Journal of American Studies*, vol. 35, no. 2, 2001, pp. 313-35.
- 藤平育子 「踊る女たち / 撃つ男たち—トニ・モリスン『パラダイス』の戦争と平和」『文学的アメリカの闘い—多文化主義のポリティクス』原川恭一・並木信明編、松柏社、2000年、39-62頁。
- 森あおい『トニ・モリスン「パラダイス」を読む』彩流社、2009年。